写真提供◉読売新聞社

大学とオリンピック

第4回

部の伝統ゆえ、オリンピックを辞退

教育ジャーナリスト
小林哲夫

こばやしてつお
1960年神奈川県生まれ。おもに教育、社会運動について執筆。94年から『大学ランキング』の編集者。著書に『ニッポンの大学』『東大合格高校盛衰史』『高校紛争 1969-1970』『神童は大人になってどうなったのか』など。

「二選手（東大）が辞退」の衝撃

一九六四年オリンピック東京大会の日本代表選手は三五七人を数える。過去のオリンピックのなかで最も多い。次いで、二〇一六年リオデジャネイロ大会の三三九人だった。これは開催国枠として、海外での予選を経ずに出場できた種目があったからだ。

六四年東京大会の代表のうち大学生は一一二人、三一・八％である。大学生、大卒の合計は二七四人を数え、七六・八％にのぼる。当時、大学進学率が一〇％台だったことを考えると、オリンピック日本代表は高学歴社会だったと言える。

このなかで、学生の比率が高かった競技はやはりボートである。代表二六人中二五人が学生だった。内訳は早稲田大九、慶應義塾大三、中央大三、日本大三、明治大二、東京医科歯科大二、東京教育大一、一橋大一、立教大一（卒業生は慶應大一）。

ところで、六四年東京大会のボート競技では、東京大の学生二人が一度は選ばれているが、出場しなかった。このことはあまり知られていない。「2選手（東大）が辞退」というショッキングな見出しで、次のように報じられている。

「ボート・エイト（引用者注・漕手八人、舵手一人の艇）の五輪候補選手のうち、東大の大隅多一郎（二一）長島洋一（二〇）の両選手は一身上の都合を理由に五日、日本漕艇協会へ候補選手を辞退すると届け出た。協会としては個人的な意思を尊重したいとして同日辞退を了承した。辞退の理由は、両選手がこれまでの東大クルーと離れ、各大学の選手にまじってこぐのに関心がないというもの」（『朝日新聞』一九六三年十一月六日）

大学ではなく学生を選抜するピックアップクルー

大隅多一郎は現在、日本ボート協会監事をつとめている。東京大漕艇部の様子、オリンピック「辞退」の経緯について話を聞いた。

大隅は、一九四二年静岡県生まれ。六二年県立静岡高校から東京大に進む。大学のクラスで「背が高いからボート部はどうか」と誘われて初めてオールを握った。東京大、東北大など「官学」が六〇年ローマオリンピックにボートの日本代表で出場していたことも魅了された一つである。だが、大隅は初心者として苦労した。

「ボートは人間の体を動かすことで漕ぎ、体の持っている力を最大限に使うことが求められます。そのため、まず足の押しが利いている間は、上体を前傾姿勢のまま保ち、足が伸びきったあとに背筋を使ってさらに押し、最後は腕を使いきって押します。『まず足を使え、上体で引くな』と注意されたものです。三ヵ月ぐらい経って、ボート経験者で前方の漕ぎ手から『軽くなった』と言われ、やっと教えられた漕ぎを身につけたと思いました」

大隅はすぐに頭角を現して対校戦のメンバーに選ばれ、合宿生活を送ることになった。東京大は埼玉県の戸田に鉄筋三階建ての合宿所をつくったばかりである。一〇〇人収容で、八人部屋が一二室備えられていた。大学の合宿所といえば大部屋で雑魚寝するところが多かったなか、ベッドルームも三部屋あり、東京大の合宿所は他大学から天国のような環境とうらやましがられた。

六二年、日本漕艇協会（現、日本ボート協会）が、六四年東京オリンピックを見据え、各大学ボート部から体力がある学生を選抜して、合同合宿を企画した。東京大からも大隅ほか六人が参加している。この合宿は翌年も行われ、大学ボート部選手の体力増強がはかられた。

六三年、東京大は全日本選手権エイトで優勝する。

その後、日本漕艇協会は翌年の東京オリンピック代表として体力に優れた学生を大学ボート部から選ぶと発表した。これまでのように大学単独では体力がある学生が揃わないからという理由だった。大学ではなく学生個人を選抜するという意味でピックアップクルーと呼ばれたが、メンバーとして召請されたのは関東の大学のみであったため北海道大、東

北大、京都大などの地方大学が猛反対した。

ピックアップクルーとして、東京大から大隅と長島が選ばれ、新聞にも掲載された。

しかし、東京大もこの選考には、公平、公正さがないと反対し、「オリンピックに選手を出さないほうがいい」という結論になった。

「大学ボート部活動を通して」こそ

東京大漕艇部のコーチは大隅を次のように説いた。

――これでいいのか。大学のボート部の義務の一つには、ここで培ってきた強さ・漕法を先輩から継ぎ覚え、それを自分の体に覚えさせ、さらに後輩に伝える。君らがいなくなったら伝統の漕法を後輩に継ぐことができず、ボート部の伝統は途絶える。各大学のボートの漕ぎ方を部活動で伝える、そのプロセスの中に自分自身を置き、ボート部の伝統を引き継いでいく真摯な努力の中で、自分自身がいかに成長するかにつながっていく。オリンピックで勝つためにがんばっても、オリンピックが終わったら何が残るのか。懸命に努力することで自分が立派になる、一緒に練習した仲間全体が良くなることのほうが価値はあるのではないか――。

大隅はこの考え方を受け入れた。それは、その年、全日本選手権（エイト）で優勝した翌日の感慨につながるという。こう話してくれた。

「全日本エイトで優勝できたとき自分の気持ちは盛り上がったが、その翌朝、合宿所から外を見ていたら、昨日と同じように陽が昇り、新聞配達、通勤する人が行き交う街を見て、世の中、きのうと同じで何も変わらない。勝つことの意味を考えさせられました。勝った喜びに高揚したのは自分だが、我々以外の世の中はそれぞれの価値観の中で進んでいる。優勝したことは自分自身に何かをもたらすが、自分以外の人々には同じような関心は持ってもらえないと感じた。この経験を基に、自分自身の価値観として、自分が大学ボート部の活動を通して身につけるものは自分自身の人間としての成長ではないかとぼんやり考えていたこともあり、代表辞退を違和感なく受け入れました」

大隅が日本漕艇協会に出向き辞退を申し出ると、副会長からこう怒られた。「オリンピックに出て日の丸を上げるのが男子の本懐」。だがその後、大隅たちは「自分たちのボートは強くなればいい」と、いつもどおり厳しい練習に励んだ。

オリンピック東京大会のボート競技は戸田で行われた。東京大の合宿所の目の前なので、大隅たちは大会中、ときおり観戦させてもらっていた。

医、歯学部から代表選手に

同大会のボート競技（舵手なしペア）には東京医科歯科大歯学部四年の黒崎紀正、向後隆男が出場している。

黒崎は一九四三年栃木県生まれ。祖父、父の代から続く歯科医の家の長男として生まれた。

六一年、県立宇都宮高校を経て大学へ入学する。高校時代までスポーツの経験はなかったが、身長約一八一センチ、体重約八〇キロと体格は恵まれ、運動神経、体力ともに優れていた。東京医科歯科大ボート部はそんな黒崎を、オリンピックを狙える有望新人と注目しており、黒崎は熱心な勧誘を受け、入部した。

大学にボート部が作られたのは一九五七年のことである。東京大、早慶大のボート部が五〇年以上の歴史がありオリンピック代表を多く出していることに比べると、東京医科歯科大には歴史がない。まさに、「新参者」だ。

しかし、東北大より招いた尾崎進の熱血指導によりみるみる強くなり、六〇年ローマ大会の代表選考会ではあと一息、というところまで善戦し、関係者はおおいに悔しがった。もっとも、黒崎はそんな経緯があったことを知らない。黒崎に話を聞いた。

「医科歯科大のボート部が強いこと、いや、六四年に東京オリンピックがあることさえも知らなかったし、出ようなんて思いつきもしませんでした」

ボート部はオリンピック東京大会をめざして強くなるために、尾崎から後任を推薦してもらい、兒島伊佐美がコーチに就任する。当時のボート部には主力となる選手が少ないこともあって、兒島はマン・ツー・マンで熱心に教えた。

ただ、練習環境に恵まれているとはいえなかった。教養部のある国府台キャンパス（千葉県市川市）近くの寺や農家の納屋などを借りて部員全員が雑魚寝をしていた。朝五時に起床して八時まで、夕方は大学から戻って陸上トレーニングに励んだ。学年によって授業や実習の時間帯が異なるので部員がなかなか揃わなかったが、レースのシーズンになると、戸田のボートコース近くの民家を探し、そこで合宿を行っている。

「大学に入りたての頃は筋肉がついていなかったが、兒島さんに鍛えられました。国府台のキャンパスの松の木に吊したロープを登ったり、近くの里見公園脇の坂のダッシュを繰り返したりしたことで、腕力、足の

筋力が相当つきました。また、当時はまだおおらかな時代で、練習に疲れて授業や実習をすこしサボっても後で挽回できれば許されるところがあった。いまは出席が厳しくなって、すこし窮屈な感じで余裕がないと思います」

オリンピック開会式では選手は背の高い順に並んでおり、黒崎は男子二列目の最も内側で行進した。レースでは予選五位、敗者復活戦では完敗し、決勝へは進めなかった。

「出走クルーの情報がまったくなかったので、自分のペースで漕ぐしかなかった。日の丸を背負ってという感じはなかったですね。開会式は待たされたという印象はありますが、天気が良く入場行進はとても良い気分でした。二〇二〇年大会は七～八月に開かれますが、暑い盛りに試合をするのは大変でしょうね。もっと涼しい季節、十月にやればいいのに」

黒崎は大学卒業後、大学院を修了して研究者となり、東京医科歯科大教授、同大歯学部附属病院長をつとめた。ペアの相手だった向後は、のちに北海道大歯学部教授となった。コーチの兒島はのちに東京電力副社長、日本原燃社長をつとめた。

これまでオリンピックに出場した医、歯学部の学生は少ないが、珍しいというわけではない。ボート競技では五六年メルボルン大会に出場した慶應義塾大医学部四年の比企能樹がおり、当時をこうふり返っている。

「実は、私のオリンピック出場を許可するかどうか、医学部の教授会で問題となっていたそうです。なぜなら、出席日数が足りないからです。教授会の大勢としては、『もし行くなら留年させろ』という意見が多かったようですが、その場で、当時の学生部長であり、薬理学の教授であった西田先生の『行かせましょう』の鶴の一声で私は晴れてオリンピック代表になれました」（慶應大弁論部エルゴー会〔OB会〕会誌『ERGO』四八号、二〇一七年四月）。

ところで、オリンピックのボート競技と歯学部はなぜか縁がある。

七六年モントリオール大会のボート競技では、東京医科歯科大歯学部学生だった俣木志朗が出場している。その二〇年後、九六年アトランタ大会では新潟大歯学系研究科の大学院生、小日向謙一が、軽量級ダブルスカルで出場した。

六八年大会出場の同志社大選手を訪ねる

一九六四年東京大会以降、学生とボート競技の親和性は保たれただろうか。

六八年メキシコシティ大会のエイト代表は、六四年東京大会のようなピックアップクルートではなく、全日本選手権大会が代表選考会を兼ね、優勝したのが同志社大である。出場者を訪ねた。

エイトの「整調」（ストローク。船尾に最も近い漕手）だった清水正俊は、高校時代からの経験者である。四八年三重県生まれ。県立津高校時代にボートで国体に出場している。

六六年、同志社大商学部に入学した。ボート経験者ですぐ通用すると思っていたが、一軍になるとスピードについていけずオールを腹にぶつけ水上に投げ出されてしまった。これを「腹切り」と呼ぶが、このことで清水は鼻をへし折られてしまった。そこで、さらに体力をつけ、優れた漕法を身につけていく。清水はこうふり返る。

「ボートはリズムとスピードが大切です。八人のオールがぴったり合って足の裏でスピードを感じる。それを皆で共有化した時、気持ち良いスピードとリズムを瞬間・瞬間で体感できるわけです」

エイトの「バウ」（船首に最も近い漕手）だった新井喜範はそれをこう表現している。

「何か別の世界に入るという感じでしょうか。漕いでいてネガティブな要素が消えリズムが合う。メンバー全員が足の裏で感じた力を共有化した瞬間、速くなる楽しさを覚えました」

新井は大学からボートを始めた。四八年石川県生まれ。県立金沢泉丘高校から同志社大商学部に進んだ。練習では筋力アップに取り組み、トレーニングに耐え、フィジカル面でメンバーに肩を並べ、大学三年になってエイトに加わる。

メキシコシティ大会本番。同志社クルーは予選で敗退する。清水、新井はこうふり返る。

「レース会場が標高二三〇〇メートルの高地にあり、練習時から息苦しくリズムどころではなかった。高地トレーニングもなく、レース艇到着は遅れ、ぶっつけ本番に近かった」

清水が話す。

「僕たちの前のレースで選手が倒れ、途中棄権者が相次ぎ、不安が募ってきた。そして本番では七〇〇メートルほどで離され、オールは重くなり、心臓は破裂しそうでした。国内では敵なしでいつも先頭を切り、追い抜かれたのは初めての経験で、追いつくにはどうしたらいいのかとパニックになってしまいました」

清水、新井は大会中、選手村で多くのアスリートと遭遇した。二人は懐かしむ。

「マラソンのアベベが娯楽室に入ってきた時オーラが広がり、そこにいた選手が一斉にふり返りました」（新井）

「チェコスロバキアのチャスラフスカの凛とした美しさは忘れられません。母国がソ連に侵された状態にあるのに」（清水）

帰国後について、清水はこうふり返る。

「大会が終わり、残ったメンバー六人と新メンバーは猛練習に耐え、六九年に全日本二連覇を果たし溜飲を下げた。屈辱と復活である。だからメキシコのことは二年にわたる」

清水は大学卒業後、就職先でボート部創設を打診されたが固辞する。「ボートから離れ、自分の力で仕事を切り開いていった。今ふり返るとオリンピックの体験が大きい」と話す。

一方、新井はこう述懐する。

「僕はボートを始めて二年三ヵ月でオリンピックに出られた。厳しい練習に耐えた者に与えられる『幸運』だったのかな」

学生が一つの種目でチームとしてオリンピック代表となったのは、六八年メキシコシティ大会のボート競技が最後といっていい。その後、学生がエイトで出場することは少なくなり、シングルスカルなどでも学生より社会人が代表に選ばれるようになった。

ただ、大学からボートを始めた選手は少なくない。そのため、私立大学のボート強豪校だけではなく、国立大学の学生、卒業生からオリンピック代表が次のように出ている。

七六年モントリオール大会＝東京大、鹿児島大、東京医科歯科大。八〇年モスクワ大会（日本はボイコットしたが代表は選出）＝佐賀大。八八年ソウル大会＝富山大。九二年バルセロナ大会＝富山大。九六年アトランタ大会＝新潟大、愛媛大。

九六年大会に出場した武田大作は七三年生まれ。愛媛大の大学院生だった。その後、二〇〇〇年シドニー大会、〇四年アテネ大会、〇八年北京大会、一二年ロンドン大会と五回連続出場している。

男子バスケットボールは学生が奮闘

オリンピックでは、今では想像できないほど学生が健闘した競技がある。その一つがバスケットボール（男子）代表だ。時計の針を一九五〇年代、六〇年代に戻し、当時、代表選手を送り出した大学（学生、卒業生）を見てみよう（カッコ内は学生）。

五六年メルボルン大会＝立教大六（二）、明治大三（一）、東京教育大（筑波大の母体）一（一）、慶應大一。

六〇年ローマ大会＝立教大六（一）、東京教育大二（一）、明治大二（一）、慶應大一（一）、早稲田大一。

六四年東京大会＝明治大三（二）、立教大三、日本大二（一）、東京教育大一（一）、明治学院大一。

五六年、六〇年の両大会では、立教大の前田昌保コーチが日本代表を率いており、メンバー構成は立教大中心となった。当時、立教大はやたら強かった。全日本大学バスケットボール選手権大会で五二年、五四年、五五年、五八年、六一年、六二年に優勝している。これは、「体育会推薦入学」というスポーツ推薦制度によって有望な選手が活躍していたことによる。

たとえば、五五年のバスケットボール部入部者について、当時の四年生（荒井洵哉、加瀬正巳）、ライバル校コーチ（東京教育大、吉井四郎）がこう語っている。

「荒井　僕らが四年の時の一年生が、あの時、日本の五十何人ですかね。五十四、五人いて、それが各地方のトップクラスが全部入っていた。

加瀬　あの時、高校界の上から数えて十三人全部がいた。（略）

吉井　大学、実業団を含めて、その当時のチームでは相対的に、人の能力からいったら、死ぬまでに一回くらいこんなチームを持ってみたいなという感じのチームだったね」（『立教大学バスケットボール部創部60周年記念誌』一九八五年）

実際、立教大には粒選りの選手が集まっていた。なかでも五五年入学組の奈良節雄の技量は突出しており、五六年メルボルン大会に出場、卒業後も六〇年、六四年と三大会続けて出場した。当時の学生新聞には奈良はこう紹介されている。

「立大に入学してわずか二年、チーム中一番若く十九才で代表に選ばれた幸運児だが、今日の栄冠も中学時代からつちかわれていたのだ。非常に真面目な選手で前田コーチにいわせると、『若いが日本人ばなれしたバネと当りをもち外国人の間でもひけをとらない。』そうだ」（『立教大学新聞』一九五六年十月二十八日）

立教大は「体育会推薦入学」でスポーツ強豪校となった五〇～六〇年代、野球、ハンドボール、バレーボール、サッカー、アメリカンフットボールなどで大学日本一になっている。六四年オリンピック東京大会のサッカー代表には学生の横山謙三（のちに日本代表監督）、卒業生の鈴木良三（浦和西高校時代に全国優勝）が選ばれている。

しかし、立教大は七〇年度入学を最後に、「体育会推薦入学」を廃止する。それから四〇年近く経った二〇〇八年、「アスリート選抜入試」を導入した。この入試によって入学した立教大生に、オリンピック出場が期待されている。

（敬称略）